

三 郎 山 乙 (あ と が き)

◆今回の特集は、前号での予告と内容を変え、「子どもの日本語教育」に関する小特集とした。現代の日本語教育が抱える課題は、多数あるが、当会・当部のおかれた状況に鑑みて、緊要なテーマと考えたからである。（「日本語教育の歴史」に対する振り返りは、次号以降で取り上げていきたい。）

◆特集巻頭の青沼志津子さんの論文は、長野県内の高等学校を対象に日本語教育の現状を考察したもの。これまでの先輩（丸山久美子さん～中学校対象，大川光世さん～小学校対象）の手法にならい、自分なりの考察を加えている。これで、県内の小学校から高等学校に及ぶ日本語教育の現状に対する見通しが可能となった。今後は、各学校間の連携や全体像の見直しについての考察・提言が必要となろう。なお、関連する話題として県内の高等学校で、英語以外の外国語教育に取り組む事例紹介があった（SBCテレビ〈信越放送〉「ほっとスタジオ」1999.1.13）。それによると、韓国語・朝鮮語が松本蟻ヶ崎高，上田西高で、中国語が阿智高で、ドイツ語が松本筑摩高で、それぞれ教えられているとのことである。日本語を母語としない生徒たちに対する母語保持教育、ならびに一般の日本人生徒たちへの異文化理解教育との関連で注目したい。

◆特集の後半は、子どもの日本語教育に関係する研究文献目録である。関連分野を広くもつテーマゆえ、遺漏も多かろうと思われる。誤りとともにご指摘いただければ幸いである。

◆投稿論文のコーナーには、今回も李仁淳氏から力作をいただいた。共時・通時の両面にわたる分析の深みを味読されたい。

◆次号では、新メンバーによる活気あふれる活動内容をお伝えできるようにしたいと願っている。

(大橋敦夫)